

2021/01/31

ヨハネの福音書 講解メッセージ③⑤

『イエスは涙を流された』(2) ヨハネ 11:41-57

## ■ラザロがよみがえる

「そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです。」そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどこいてやって、帰らせなさい。」(ヨハネ 11:41-44)

墓の石が取りのけられるとイエス様は、彼らの「不信仰」を砕こうと、「この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために」と、祈られました。この祈りからも、イエス様の涙の意味は人々の「不信仰」であったことがよく分かります。それから大声で「ラザロよ。出て来なさい。」とイエス様が叫ばれると、ラザロが出て来たのです。

この奇跡を見た瞬間、イエス様の言葉を信じなかった彼らは、いったい何を思ったことでしょうか。私たちは、人々はさぞかし歓声を上げ、喜んだことだろうと思ってしまいがちですが、冷静に考えると、奇跡を見た瞬間、誰もが言葉を失ったであろうことが容易に想像できます。なぜなら、それは自分の「不信仰」の罪が明らかになった瞬間だからです。弟子たちも、この姉妹も、また周りの人々も、誰もがイエス様の言葉を信じず、ただただ泣くだけであった自分を知っていたので、ラザロがよみがえった姿を見た瞬間、自分の「不信仰」の罪に打ちのめされたのです。そして、彼らの心は神に叫びました。

「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13)

彼らは、声なき声で、神に叫びました。そんな彼らにイエス様はこう言われました。「ほどこいてやって、帰らせなさい。」

はたしてイエス様は、この言葉をどのような調子で言われたのでしょうか。怒って言ったのでしょうか。それとも優しく微笑みながら言ったのでしょうか。

残念ながら、イエス様のその時の「非言語」は、この文字だけでは分かりません。しかし、人と人のコミュニケーションで重要な役割を果たすのは、相手が何を言ったかではなく、どのような口調で、どのような様子でそれを言ったのかという「非言語」です。「目は口ほどに

物を言う」ということわざがあるように、「非言語」には力があり、人は言葉での会話を交わさなくても、相手のちょっとした仕草から、相手の思いを推し量ることができます。

例えば、親が子どもに微笑みながら優しく、「こんなことも分からないのか。バカだな」と言えば、子どもはその言葉を、自分が愛されているという意味に理解します。しかし、同じ言葉を厳しい口調で怒りながら言えば、子どもはその言葉を、自分は愛されていないという意味に理解します。このように、何を言ったかではなく、そこで用いられた「非言語」が、コミュニケーションにおいては重要になるのです。

では、イエス様はどのような「非言語」で、「ほどいてやって、帰らせなさい」と言われたのでしょうか。それは優しい目で、優しく語られたのです。人々は、イエス様の「非言語」から、「心配するな。わたしはあなたの罪を赦すし、それでもお前を愛しているから」という神の思いを悟りました。なぜそのようなことが言えるのかというと、もし「人間的な標準」でこの場面を見るなら、イエス様は、「なぜ、信じなかったのか。見なさい。ラザロはよみがえったではないか。この不信仰な者たち、罪を悔い改めなさい」と言ったはずだからです。しかし、イエス様はそのようなことは言わず、ただ、「ほどいてやって、帰らせなさい」と言われただけです。つまり、この時のイエス様は、彼らの心が、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と叫んでいたのを知り、彼らの顔を優しく見渡し、優しい口調で、「ほどいてやって、帰らせなさい」と言われたのです。そうした「非言語」を通して、彼らに罪が赦されたことを悟らせたのです。この推論が正しいことは、このあとの彼らの行動が証ししています。

## ■その後の彼ら

「そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなされたことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。しかし、そのうちの幾人かは、パリサイ人たちのところへ行って、イエスのなされたことを告げた。」(ヨハネ 11:45-46)

「信じた」とは、「不信仰」の罪が赦される体験をしたということではなく、何なのでしょう。そこにいた大半の人は罪が赦された体験をしたので、イエス様を多く愛するようになりました。それは、次の出来事からもわかります。

「人々はイエス様のために、そこに晩餐を用意した。そしてマルタは給仕していた。ラザロは、イエス様とともに食卓に着いている人々の中に混じっていた。」

(ヨハネ 12:2)

この時のイエス様は、すでに命を狙われ、イエス様を密告するように命令が出ていました。

「そこで彼らは、その日から、イエス様を殺すための計画を立てた。」(ヨハネ 11:53)

「祭司長、パリサイ人たちはイエス様を捕らえるために、イエス様がどこにいるかを  
知っている者は届け出なければならないという命令を出していた。」(ヨハネ 11:57)

そのような中であっても、再びイエス様がベタニヤに来られた時、彼らは自らの危険を省  
みることなく、イエス様のために晚餐を用意したのです。イエス様を心から愛する彼らの行  
動が、彼らが罪を赦された体験をしたことを物語っています。そして、マルタは黙々と給仕  
していました。かつて給仕をした際、「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何  
ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください」  
(ルカ 10:40) とつぶやいていた、あのマルタです。罪が赦されたという体験がなかった時に  
は、自分が良く思われたいという思いから給仕したのでつぶやいてしまいましたが、今回は、  
自分の「不信仰」の罪が赦されたことの感謝から給仕をしています。そして、イエス様に期  
待されながらもイエス様の言葉を信じなかったマリヤは、次のような行動に出るのです。

「マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエス様の足  
に塗り、彼女の髪の毛でイエス様の足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいにな  
った。」(ヨハネ 12:3)

マリヤは、ただただ感謝の思いから、誰よりも多くイエス様を愛したのです。それは、ラ  
ザロのよみがえりを目の当たりにした時、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」  
と、誰よりも彼女の心は叫び、「ほどいてやって、帰らせなさい」の言葉で、誰よりも多くの  
罪が赦されたことを体験したからです。つまり、このマリヤの行動こそ、あの時のイエス様  
の「非言語」が何であったかを知る決定的な決め手になります。イエス様は香油を塗った女  
性について、次のように言われているのです。

「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさと分かる。赦され  
ることの少ない者は、愛することも少ない。」(ルカ 7:47 新共同訳)

ここでのマリヤは、「非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエス様の  
足に塗り、彼女の髪の毛でイエス様の足をぬぐった」とあります。彼女が示した「愛の大き  
さ」から、彼女が多くの罪を赦される体験をしたことは明らかです。ならば、いつどこでそ  
のような体験をしたのかとヨハネの福音書を見渡したとき、先述した場面しか見当たりませ  
ん。ですから、ラザロがよみがえった時のイエス様の「非言語」は、「心配するな。わたしは  
あなたの罪を赦しているから。それでもわたしは、お前たちを愛しているから…」という神  
の思いを伝えるものであり、優しい目で優しく語られたと推察できるのです。

## ■人となられた神

さて、ここで一つの疑問を解決しておきましょう。ここまでイエス様と人々のやり取りを見てきましたが、そもそもイエス様は全知なる神なのですから、初めから相手がどのような反応をするかは分かっていたはずですが、それなのに、なぜあのような話をし、信じてくれなかったと涙を流されたのでしょうか。わざわざマリヤを呼びに行かせなくても、彼女がどのような応答をするかは分かっていたはずなのに、どうしてそのようなことをされたのでしょうか。

それは、イエス様はこの地上では、「人間」と同じ制約の中にあっただからです。それゆえ、神が持っている全知は使えなかったのです。そのため、神として（キリストとして）地上で活動するには聖霊の助けを必要としました。それで、宣教を開始する際、「すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった」（マタイ 3:16）のです。さらには「人間」と同じ制約の中にあっただので、御心を実現するには絶えず祈る必要がありました。

聖霊は必要なときにその思いをイエス様に教えられたので、イエス様は人の思いを知ることができましたが、ここでは教えられませんでした。それは、次のような理由によるものです。

イエス様が来られたのは、「否定」という「悪」に苦しむ人たちを救い出すためです。「死」による「否定」によって、罪を犯すしかない病気にある人たちが癒やされるためには、彼らが自分の状態を知り、神のもとに来る必要がありました。神を信じたくても、どうしても信じ切ることができない「不信仰」の罪に気づく必要があったのです。それはちょうど、手に負えない病気に気づいて、癒しを求めて医者の方に行くのと同じです。イエス様は、「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」（マルコ 2:17）と言われました。

そうした事情から、イエス様はあえてあのようなやり取りを人々となさいました。イエス様は聖霊によってラザロがよみがえることを教えられていたので、弟子には、ラザロを眠りからさまして行くといい、マルタには、ラザロはよみがえるといい、わざわざマリヤを呼びに行かせ、そうすることで、彼らが「不信仰」の罪に気づけるよう準備をし、ラザロをよみがえらせることでその罪を明らかにされたのです。そして、罪を無条件で赦すという手術を行い、その罪を癒やされました。

このことが分かれば、イエス様が流された涙の意味がさらに深く見えてきます。それは、「不信仰」という罪の病気で苦しむ我が子を見て、いたたまれなくなった悲しみです。ただ単に、「不信仰」を見て悲しまれたのではなく、人がそうした罪に苦しむ姿を見て、激しいあわれみから涙を流されたのです。

神様は、人が「神の言葉」を素直に信じようとしない「不信仰」で苦しむ様を見て涙されるのです。それゆえイエス様は、「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9 新共同訳）といい、「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです」（ヨ

ハネ 6:29) と言われたのです。ラザロのよみがえりの出来事は、人に何が罪であるかを教え、それでも神は罪を赦し、人を愛されることを教えたものです。

神は人に何を求めていること、それは、「神の言葉」を素直に信じ、神を信頼することです。これこそが、神を愛することの中身にほかなりません。神を愛する上での戦うべき敵は「不信仰」です。「神の言葉」を「否定」してくる「悪」と戦い、「理性」による「納得」を目指すことのないように、心に留めましょう。「神の言葉」を素直に信じることを目指すことが、神を愛することです。

それは、イエス様が「キリスト」であると信じるだけにとどまらず、「キリスト」を信じている者は誰であれ、「永遠のいのち」を持っているということこそ、神が最も信じてもらいたいことなのです。イエス様がマルタに、「生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか」(ヨハネ 11:25-26) と迫ったように、信じるものは決して死ぬことがないということを、神は信じてほしいのです。